

潮流

アベベが走り抜けた路

理事長 皆川 芳嗣

人生で二度目に夏のオリンピックが自国開催となった第32回オリンピック東京大会であるが、新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のために無観客開催という前代未聞の事態となった。そこでこの機会に、1964年の第18回オリンピック東京大会を振り返るとともに、その後今日までのスポーツ界を始め日本及び世界の変化について考えてみたい。

前回の東京五輪で一番印象に残ったのは何かと問われ、菅首相はバレーボールの「東洋の魔女」の活躍だと答えていた。小学校4年生だった自分にとっては、日本武道館の柔道無差別級で神永がオランダのヘーシンクに袈裟固めで敗れたシーンと、最終日にマラソンで優勝したエチオピアのアベベ・ビキラが独走中見せた哲学者然とした風貌であろうか。当時のマラソンのルートは、千駄ヶ谷の国立競技場をスタートして中央線に沿って西走、明治通りを北に少し走って左折し、新宿駅南口の跨線橋を越えたら調布まで甲州街道を一直線に走り往復するというものであった。最近車の運転を楽しむので甲州街道はお好みのルートだ。路の両側に聳える櫟並木がトンネルの様に枝を広げて夏空の強烈な日射を遮ってくれる。アベベもそんな櫟の下を快走したのだと信じ込んでいた。しかし違ったのだ。市川崑監督の東京五輪の記録映画はマラソンレースの模様を30分近くも撮っていたが、よく見ると沿道の観衆は映っていても57年前の甲州街道に櫟の並木はまだ育っていなかったのだ。これは一例に過ぎず、今は当たり前だが当時は存在しなかったものは極めて沢山ある。逆もまた然りである。

前回の東京五輪の参加国・地域はそれまで最多の93を数えた。当時アフリカの旧植民地で独立が進み、少人数ながら初めて選手団を送ってきた国々が目立った。色彩豊かな民族衣装に身を包み昂然と胸を張って行進する彼らにスタンドから大きな拍手が送られていた。大選手団を送ってきていたソビエト連邦は今はなく、最大の選手団を参加させた統一ドイツ（西ドイツ、東ドイツの混成チーム）はベルリンの壁崩壊後、国家としての統一を果たしている。今はスポーツ大国でもある中華人民共和国は未だ参加していなかった。前回大会時世界を覆っていた東西冷戦は終わったが、その後も民族や宗教対立を始め紛争の種は世界各地に尽きることはないし深刻化している。今回の参加国、地域は205に上るが、アフガニスタン紛争時のモスクワ五輪のボイコットの例もあるように、今後地域紛争や米中対立等がオリンピックの参加に影響を与える事も懸念されている。一方、紛争地域のアスリートの参加を可能にした難民選手団が2016年のリオ五輪から初めて参加している。

次に実施種目数と参加アスリートの総数、男女比を見てみよう。前回は20競技、163種目に5152人が参加しているが、圧倒的に男性優先で女性割合は13.2%に過ぎなかった。一方今回は33競技339種目に前回の倍の11000人が参加するという。決定的に違うのは女性割合が48.8%とほぼ男女半々になっていることだ。体重のクラス分けが違うぐらいで男女一緒の種目が設定されているし、新

体操の様に女性のみ実施されるものもある。日本のメダル有望種目と言えば女子柔道、レスリングが挙げられるが、前回五輪時には多くの人々がそんな時代が来るなど想像していなかったのではないだろうか。「女性にマラソンは過酷すぎる。格闘技は母性に合わない。」など、男性目線で種目が選択されていたと言っても過言ではなかった。その後多くの人々の長きにわたる努力があってスポーツにおけるジェンダーギャップは改善して来たのだと思う。LGBT への対応も今後何十年か後に振り返った時に大きく変わっているだろうか？

アベベが走り抜けた時苗木だった甲州街道の樺は人々の手入れもあって大きく成長して都市環境を守ってくれている。未来は不透明だが今日の一步がその先へと繋がっていくのだ。普段はあまり意識しないが先々の経済・社会を変えるかもしれない変革の芽はそこここにあるのだ。要はそれを伸ばすも枯らすも手入れ次第ということではないか。